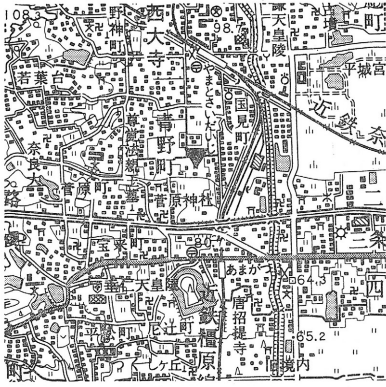


奈良・平城京跡右京二条三坊四坪

- 1 所在地 奈良市菅原町
- 2 調査期間 一九九三年(平5)四月～一〇月
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 久保邦江・久保清子
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～平安時代初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良)

○m²である。調査地は右京二条三坊四坪の東半部にあり、北辺では三・四坪坪境小路南側溝、東辺で西二坊大路の存在が想定された。検出した遺構は、古墳時代の土坑、奈良時代の道路・築地・掘立柱建物・堀・溝・井戸、平安時代初頭の掘

立柱建物・井戸である。西二坊大路は今回初めて東西両側溝を検出した。その幅員は側溝心々間で一五・六m(五三小尺||四四大尺)であり、これまで確認された他の大路と比べて若干狭いことが判明した。また道路心は朱雀大路などから推定した条坊計画心よりも西へ約八mずれていることが明らかになった。

奈良時代の遺構は、重複関係、配置、出土遺物などから大きく四時期にわけることができる。奈良時代末頃の時期には、坪の北東の一画で内部に甕を据え付けた建物三棟が整然と配置されていた。甕自体は残っていないが、据え付けた痕跡から甕の数は合計六八个以上になるとみられる。また、この時期には西二坊大路に面して門が開いていた。この点からここは三位以上の貴族の邸宅の一画であるとも考えられるが、建物の規模や配置などと合わせて考えると、むしろ公共の施設の一画であった可能性が高い。

木簡はこの時期の井戸SE五〇二とSE五〇三から出土している。このうちSE五〇二は、南北三・四m、東西三・六m、深さ二・八mの平面隅丸方形掘形の中に、内法が一边一・二mの方形横板組の井戸枠を据えていた。枠は一段あり、井籠に組む。枠内は徐々に埋まっており、井戸底から約一・五m上層で馬の脚部の骨が、そのすぐ上面からは墨書のある檜扇が出土した。これらは、井戸廃絶後、平安時代初頭頃に投棄されたと考えられる。次に、SE五〇三は、平面が長径三・八四m、短径三・五七mで、深さ二・六mの不整形

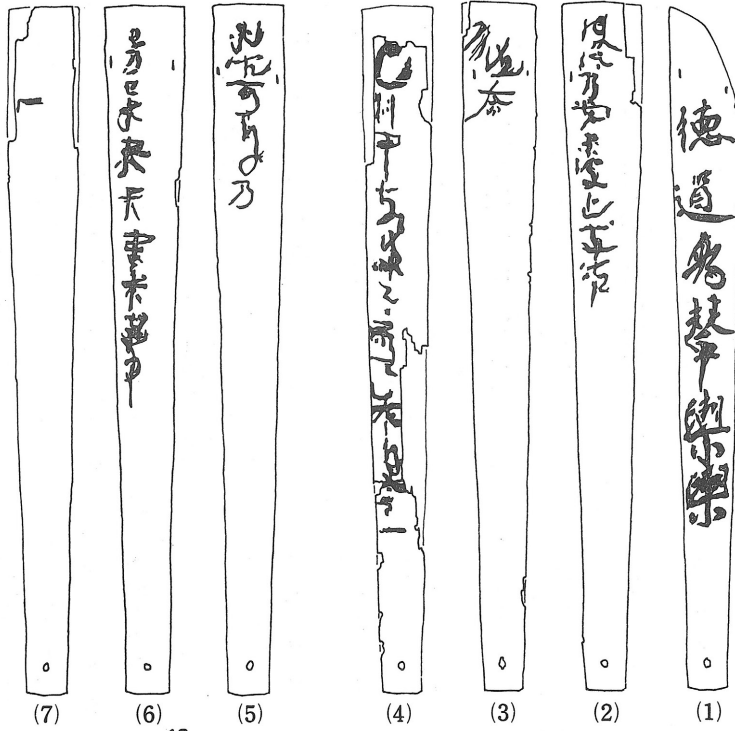
な円形掘形の中に方形の上・下二段構造の井戸枠を据える。上部の枠は内法一辺一・二mの方形隅柱横棧留縦板組で、下部の枠は内法一辺〇・七三mの方形横板組で井籠に二段組んでおり、横板の外側には縦板があてがわれている。木簡は井戸掘形から一点出土した。共存遺物には瓦、土器類、和琴の琴柱と思われる木製品がある。SE五〇三の掘形からは、猿投産のものと考えられる鳥鈕蓋が出土した。これらは奈良時代末のものと考えられる。

8 木簡の积文・内容

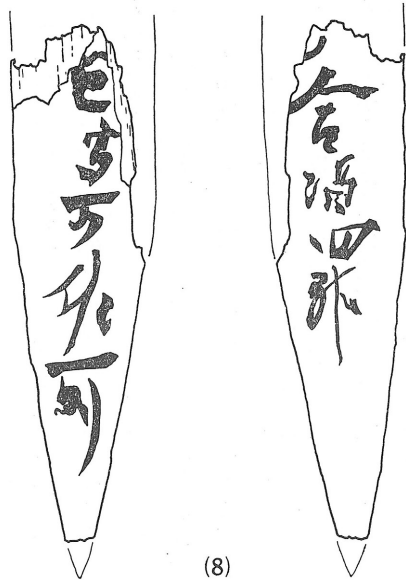
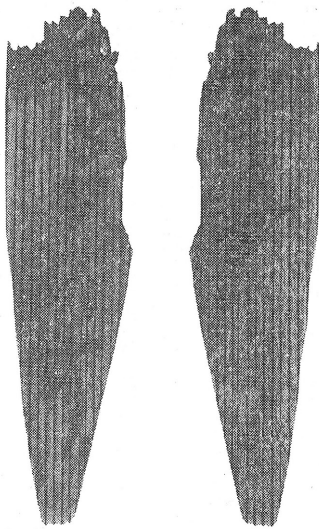
- | | | | | |
|-----|----------------------------|---|--------------|-----|
| (1) | 「徳道為輦輿興 | 〇 | 270×26×1.5 | 061 |
| (2) | 「波波乃□尔波止支□ ^{〔佐カ〕} | 〇 | 271×29×1 | 061 |
| (3) | 「□奈 | 〇 | 271×29×1 | 061 |
| (4) | 「□□甲□□□□止羅尔〇 | 〇 | (258)×25×1 | 061 |
| (5) | 「比□可タ乃 | 〇 | 271×29×1 | 061 |
| (6) | 「己乃己米米津米己甲 | 〇 | 271×29×1 | 061 |
| (7) | 「□ | 〇 | 271×28×1 | 061 |
| (8) | ・□合酒四升
・日□万佐可 | | (102)×(25)×3 | 059 |

(1)～(7)は墨書のある檜扇である。井戸SE五〇二から骨板が三枚重なった状態で出土した。材質は檜である。一番外側の一枚は他の骨板よりやや厚めで、上端の片側には丸みがつけてあるため、親骨と考えられる(1)。もう一方の親骨は出土しておらず、骨板は本来一四枚以上あったと考えられる。他の骨板は、上端が広がる長方形である。骨板には下端から約1cmのところに要孔が穿たれているが、要は残存していない。また、それぞれの骨板の上端から二～3cmのところには左右二カ所に、骨板を綴るための糸を通した小穴が確認できる。一三枚の骨板のうち、墨書が認められるのは七枚で、親骨の墨書と同じ面に書かれているのが四枚(1)～(4)、反対面に書かれているのが三枚(5)～(7)ある。表裏ともに墨書のあるものはない。

墨書の文字は、親骨(1)のみ漢文で書かれ、(2)～(6)は万葉仮名で書かれている。(1)は(2)～(6)とは筆も異なり、文字は太く力強い。「輦」も「輿」もともに乗り物の意で、「輦輿」で特に天子の乗り物という意味がある。「輿」を二つ重ねていることから習書の可能性もある。(2)～(4)は筆跡からおそらく同一人物の手によるものと考えられる。(2)は一応「ははの□にはとき□」と読んだが、二字目を「流」、四字目を「安米」と読んで「はるのあめ……」となる可能性もある。文面からは(2)～(4)の三枚を通じて意味のあるものとは考えがたい。反対面に墨書のある(5)(6)は(2)～(4)の筆使いとは異なるため、さ

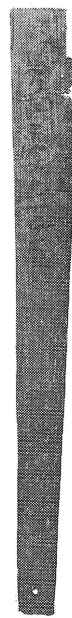
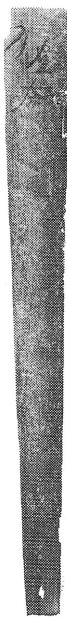
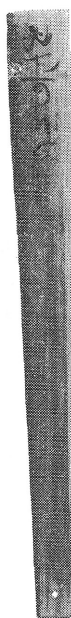
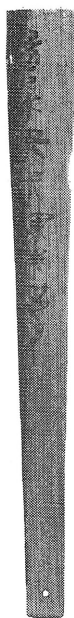
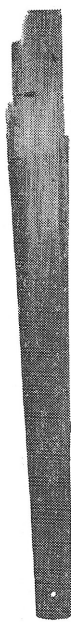
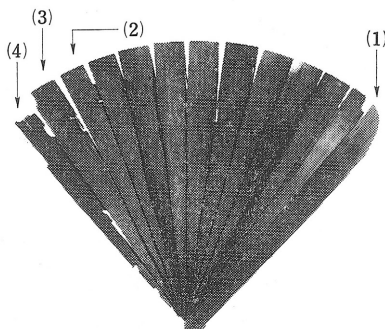
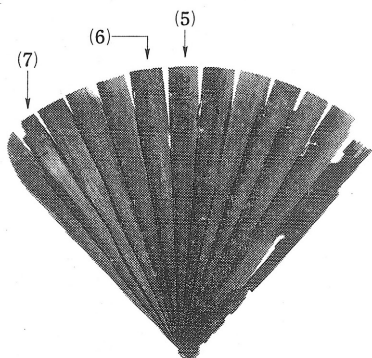


0 10cm



0 5cm

1993年出土の木簡



(7)

(6)

(5)

(4)

(3)

(2)

(1)

らに別人の手によると考えられる。(5)は枕詞の「ひさかたの」であろう。(6)は意味不明で、「米」を続けて書いており習書を思わせるものである。(7)はわずかな墨痕のみである。

これらの墨書は全体で何らかの意味をもつとは考えられず、それぞれの部分でも意味が通りにくいので、おそらく手遊びで書かれたものとおもわれる。墨書がある檜扇は平城京・長岡京などで出土例がある。また、出土資料以外の例では、教王護国寺に安置されていた千手観音立像の四二臂のうちの一本の内刳りから発見された檜扇がある(江上 綵『扇面画(古代編)』日本の美術三一九 一九九二年)。この扇には文字だけでなく、松・草・鶴・鳥などが手遊びに描かれている。檜扇の時期については、先述のように井戸S E五〇二は奈良時代末に廃棄され、その後しばらく時間が経過してから檜扇が投棄されているので、平安時代まで下る可能性がある。

(8)は井戸S E五〇三から出土した。上部と下端部が欠損しているが、形態と墨書の内容から付札と考えられる。「日□万佐可」は、上部が欠損しているため、この部分だけでは不明であるが、人名の可能性がある。この付札は井戸S E五〇三の掘形から出土しているため、井戸構築時より古いものであることがわかる。共伴する遺物から考えて奈良時代末頃のものであろう。

なお、木簡の釈読・解釈については、奈良国立文化財研究所史料調査室の方々のご教示を得た。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成五年度』(一九九四年)

(1~7 久保清子
8・9 久保邦江)